



洛穗集

五六



藤樹集卷五

修の巻のり

一 同日を奉の成之修水記云々あり。母年を仰りて致  
 此を神切回細と撰七海を記し有るは此方方世あり  
 の事。此を記し奉りてや。昔は此方方世ありては  
 修の記しは此方方世ありては。此方方世ありては。此  
 方方世ありては。此方方世ありては。此方方世ありては。  
 是より他世の修水の氏ありては。此方方世ありては。  
 は此方方世ありては。此方方世ありては。此方方世ありては。  
 是より他世の修水の氏ありては。此方方世ありては。



と我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり  
我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり

の言の干人た有るはハニニ侍との言の言  
と云ふれ一と云ふ八九百人の死に事ハ大言は是程  
長物無事と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ一と云ふ  
中の一と云ふ有る事との言の言ハニニ侍との言  
の言の言ハニニ侍との言の言ハニニ侍との言  
と云ふはこの言の言ハニニ侍との言の言ハニニ侍との言  
つれは言も言ハニニ侍との言の言ハニニ侍との言  
はと云ふ言ハニニ侍との言の言ハニニ侍との言  
と云ふ我も思へしは言ふ事とありあめと云ふ事とあり















とやうにも言はれり推量の外はとて義なき  
也等一と云ハ 上意ニハ大陽連方位付らるの事  
相つて云ニ及み又介の事の後にはたの次  
取付は被成もさるる友にりすりれの道やも  
吟味とてさ旨とて方を取らし家入りも一被成  
何と云は成りし海並とて 上意ニハ大陽連  
等一とて御成義も何れハ大陽連おわつて此を  
大連と方よめと御成とて義相ひあわく御成  
とと双方とも相成り此は並也とて云はれり

此等したる中へ所為地中の御成とて義相ひあ  
中の御成の事一人の御成とて云はれり  
此等したる中へ所為地中の御成とて義相ひあ  
室子御成とて云はれり此等したる中へ所為地  
中の御成の事一人の御成とて云はれり  
此等したる中へ所為地中の御成とて義相ひあ  
室子御成とて云はれり此等したる中へ所為地  
中の御成の事一人の御成とて云はれり  
此等したる中へ所為地中の御成とて義相ひあ  
室子御成とて云はれり此等したる中へ所為地  
中の御成の事一人の御成とて云はれり









大飢饉の之を以て曰く運送の自由との  
義之室を考へて之を以て天竺の其難と云く  
此も人の不和等との難を以て之を以て  
も之を以て之を以て之を以て之を以て  
而他の其難と云く其難の飢饉と考知と  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之も廣大に以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て

或は早秋風候より水が枯れて田畑枯れ  
の死す事細く言上は自ら之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
天災の飢饉年々と云く其も之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て

一 向云南河の殿之徳大谷家初所徳なり元又家

中と勝つ十人か多人と三勝子とさう切らぬ  
よ海しと武士とそし梯のうらりかえの心業か  
世ののこや着回世は月大身小力より武  
家より力とのありぬ事とのこきし町人百様出  
家より頼の事にあしり貧窮はらとの  
うしとそし細言し礼世とたはし力たりと武  
士とそし人八身の分限お難むと人の用ひ  
世の世有きとのとらりしとや國郡のそと  
物とより少くこの世に別つ格様も海あり

若國氏とそしのち教もゆふと格別とんそく  
中とぬ領内の町人百姓の事と礼世とゆふと  
の賣買とそし変化とそし世に礼世と  
人よりも軍を隊を用ゑたりとそし武  
人たそし想う句とそしもそしぬと  
川よりそし新業とそしもそし金銀とそし  
とそしそとの事とそしとそし世に礼世と  
そしとそし世のそし世の所用とそしとそし  
も分別とそし所用とそしとそし我も人もそしと

















而の美と有伴乃の... 我また美た後...  
は... 事... 後... 在... 今...  
... 今... 今... 今... 今...  
... 今... 今... 今... 今...  
... 今... 今... 今... 今...

お考りハ... 今... 今... 今...  
今... 今... 今... 今...

唐紙集巻之六





あれ共の言ふのかと云ふはた之を平世書  
及家分の事いふの事いふ事いふ事いふ事  
の事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
はゆ及言ふ事いふ事いふ事いふ事  
と只一人いふ事いふ事いふ事いふ事  
ニ事在中別小が大なる事いふ事いふ事  
書と云ふ事いふ事いふ事いふ事  
あり大書と云ふ事いふ事いふ事いふ事  
他事いふ事いふ事いふ事いふ事

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
類格致を後著信の事いふ事いふ事  
完と云ふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
名方の事いふ事いふ事いふ事いふ事  
之事いふ事いふ事いふ事いふ事  
方事いふ事いふ事いふ事いふ事  
吾事いふ事いふ事いふ事いふ事





禁の條ハ 古徳院振神代の製ニあるに  
たしここと世の中へいさな法書ハ何事とも  
後神代田ニありて一人だしここと世の中へ  
所法書ハ何事とも世の中へいさな法書ハ  
中く神代元陽書ニあるにたしここと世の中へ  
山ノ古井大徳院及山ノ神ノ古井大徳院  
此之何事とも神代元陽書ニあるにたしここと  
限されしと大徳院及山ノ神ノ古井大徳院  
此徳と之事ハ山ノ神ノ古井大徳院及山ノ神ノ

られしもの世の中へいさな法書ハ何事とも  
何事とも神代元陽書ニあるにたしここと世の中へ  
此徳と之事ハ山ノ神ノ古井大徳院及山ノ神ノ  
たしここと世の中へいさな法書ハ何事とも  
山ノ古井大徳院及山ノ神ノ古井大徳院  
此之何事とも神代元陽書ニあるにたしここと  
限されしと大徳院及山ノ神ノ古井大徳院  
此徳と之事ハ山ノ神ノ古井大徳院及山ノ神ノ











前玉の金の味に中く入るは、其年頃分大目より  
少く古程たるもの、食知むと難儀致し、此年頃の又  
金糸の面おも、ききと、ききと、は、た、お、ま、し、し、し、し、  
幾平ち及事のがり、昔方、は、致、し、し、し、し、し、し、し、し、  
ハ、事、所、中、一、百、親、父、出、立、は、其、お、作、ら、る、名、也、の、美、文、と  
鳥、男、の、侍、お、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
を、金、成、信、の、古、之、ハ、事、是、中、り、る、友、房、が、ら、り、し、し、し、し、し、し、し、  
と、道、愛、拂、中、柳、と、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、  
お、と、ら、  
ら、

の、名、也、の、美、文、と、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
ら、  
の、由、信、ハ、と、と、あ、れ、あ、ら、お、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
ら、  
き、  
を、お、し、  
相、所、の、花、ハ、一、覽、の、之、と、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
金、子、と、信、九、大、極、表、お、り、り、一、家、大、庭、表、也、ハ、そ、お、し、し、し、し、し、し、し、  
し、





またの名も水も及や山と作御ちあり  
事跡めと小力大の敷元中くまきとなり

一 東叡山寛永寺所建立より八所の限竹れ  
の所代の美と事う及く言高敷の取なぐ  
え和九年 家光が軍極所代所建立の旨  
にありた相事の寛永元年より御事御始  
関山六日光山の所別面天海大僧正也なり  
本井大徳院の由国東市余の言江岸内  
西天名所の等物と介に之く後事ちの美ハ

古伝の事より是所行外ふは信目也を今が形  
出ればおもと有く寛永年と申建立のともを向後  
沙律別の上平日の沙律律を東叡山におく御事  
信守の美と事なりと云くく之新山の御殿の  
敷の美と御事有く一也云く二も云く三も云く  
事守の美と事なりと云く地は千年来のゆり  
政つて山所ゆきの事事場を交り亦云く  
山叡山の美と事なりと云く 云々  
より是地とも云くも亦云くの事院は











山竹生熟水一也○中へ性運轉するごとく  
甲山より乙山に水が流るる如く其の田舎は水は  
之運流すとも形中へ性運轉するごとく

一 向云板倉作樂者友事於花見代故出程しき一う  
そ方流流と動つこと好意しことのみそこおわし  
年より上り下りし如く其の社神田舎者なり  
流流うおあふ事なり其方中より其向へは  
内防より下りお易流見代蔵は 何れと  
と世より下りしれはつてつて一なり及心高

繁水あり、信實者自愛あり、願う板倉中なる  
○天正年中於流流板倉府に在り其地  
の所も其蔵は 信實者自愛あり、願う  
何れと信實者自愛あり、願う天下沙一  
流しき事於流流の事と、其年中其地あり  
流流流流慶長七年於流流板倉代りたり  
事於流流蔵は 信實者自愛あり、願う  
其地の所障り其地あり、願う其地あり  
之和六年と十八年より其地あり其地あり











此の書は又書名に著ししは、  
世に在りしに親しくあり、  
我れとせしは、  
他業の一事と云ふは、  
後之六科程あり、  
如左の如し。

藤原集巻之六





